

19世紀ドイツにおける労働者家計

——研究課題の設定のために——

川 越 修

目 次

- I はじめに
- II 研究状況
- III 19世紀ドイツにおける労働者家計の調査
 - 1 概 観
 - 2 19世紀中葉
 - 3 19世紀第4・四半期
 - 4 20世紀初頭
- IV 結 び

I は じ め に

1950年に発表された『『全き家』と旧ヨーロッパの『家政学』』と題する論文¹⁾において、オットー・ブルンナーは「専門科学」としての「国民経済学」生誕の経緯を、「家計と経営」の分離を知らぬ「全き家 das ganze Haus」と、それに対応した「家における人間関係と人間活動の総体」を対象とする「オイコス」の学としての家政学 Ökonomik²⁾の解体という歴史事象との関連から解明しようとした。彼のこうした視点は、歴史学の専門化、細分化への反省から歴史的諸事象の繋がり「全体的」把握を目指す「社会史」研究、とりわけ家族史研究に受け継がれ、ヨーロッパにおける近代社会形成史の解説に大きな手がかりを与えている。

1) Otto Brunner, Das "ganze Haus" und die alteuropäische "Ökonomik", in: *Zeitschrift für Nationalökonomie*, 13, 1950, S. 114 ff. 邦訳は同(石井他訳)『ヨーロッパ——その歴史と精神』岩波書店, 1974年, 151ページ以下, に所収。

最近の西ドイツにおける家族史研究の一つの成果たるローゼンバウムの著書²⁾を例にとると、そこでは、生産と消費の合体した「全き家」の具現形態たる「農民家族」と「手工業者家族」、これに対し生産と消費の分離した「近代的家族」たる「ブルジョア家族」と「プロレタリア家族」、さらには両者の中間形態をとる「家内工業労働者家族」という五つの「家族形態」の相互関連が、形態相互の移行と並存という観点から歴史的に検討されている。一方、ともすると超歴史的なものとされがちな家事労働という形の女性の労働の「歴史」を扱い、これら「支払われない労働」の存在に「産業経済」の独自性を見るイリイチの「シャドーワーク」論³⁾に裏付けを与えたボックとドゥーデンの論文⁴⁾の論旨もまた、「生産労働と家事労働が空間的にも経済的にも一体をなし」ていた「旧社会」の「家族経済」モデルを基礎に組み立てられている。「家事労働」はこうした「家族経済」の解体、すなわち資本主義の歴史的展開にその起源を持ち、「高賃金と労働市場調整を内包する20世紀の修正資本主義」はこの「家事労働の創出、普遍化、制度化」によって可能となった、というのが彼女らのテーゼである⁵⁾。

さてこの近代における生産と消費の場の分離という観点から労働者史研究の状況を見ると、従来それが労働者の生活の一方の極、すなわち生産活動面に集中されたきわめて片寄ったものであったことは明らかである。これに対し最近西ドイツで興隆を見せつつある「労働者の社会史」研究⁶⁾は、この欠落を埋め、

2) Heidi Rosenbaum, *Formen der Familie. Untersuchungen zum Zusammenhang von Familienverhältnissen, Sozialstruktur und sozialem Wandel in der deutschen Gesellschaft des 19. Jahrhunderts*, Frankfurt am Main 1982. といわけ序論の研究プランの項 (S. 18 ff.) を参照。

3) I. イリイチ (玉野井他訳) 『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う——』岩波書店、1982年、所収の第6論文を参照。

4) Giesela Bock/Barbara Duden, Arbeit aus Liebe—Liebe als Arbeit: Zur Entstehung der Hausarbeit im Kapitalismus, in: *Frauen und Wissenschaft. Beiträge zur Berliner Sommeruniversität für Frauen Juli 1976*, Berlin-West 1977, S. 118 ff.

5) 以上の引用は、*ebd.*, S. 119, 122, 125, 177, による。

6) 研究動向を紹介した論文として次のものを参照。Klaus Tenfelde, Wege zur Sozialgeschichte der Arbeiterschaft und Arbeiterbewegung. Regional- und lokalgeschichtliche Forschungen (1945–1975) zur deutschen Arbeiterbewegung bis 1974, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 7

労働者の歴史を「総体的」に捉えようとする試みとして積極的な意義を持つと思われる。というのも、それらの研究にはごく大雑把に言って、労働の場のみならず居住地域や家庭における労働者の日常生活と彼らの集団的意識の形成、さらには労働者運動との間にどのような関連が存在するのかを問題とするという、共通の関心が存在するからである。

だがこうした「労働者の社会史」研究はすでに多くの研究成果を生んでいるとはいえ、地域別の事例研究のみならず、日常生活を構成する個々の問題領域についても、研究上の空白部分は大きい。なかでも、生産と消費という労働者の分裂した日常生活の両局面の交錯点とも言うべき労働者家計の分析は、19世紀中葉以降、様々な試行錯誤を伴う相当の調査・研究蓄積があるにもかかわらず、現在ではきわめて不十分にしか行なわれていないように思われる。この研究上の欠落は、工業化の初期段階の都市下層社会のなかから都市労働者家族が形成され定着してゆく歴史的過程を、家計分析を一つの指標として検証してゆこうとする中鉢氏の研究⁷⁾をはじめとする、我国の「生活研究」の豊富な研究蓄積⁸⁾と対比するならば、一層明らかになるう。

本稿は、こうした問題意識から19世紀ドイツにおける労働者家計の歴史的 연구に着手するにあたり、家計史研究が「労働者の社会史」研究に対して持つ意義と限界を探ることを一つの目的としたものである。以下、まずこの主題をめぐる研究の現状を明らかにしつつ家計史研究の果たすべき課題を考え、次いで、19世紀ドイツにおける労働者家計の調査史を、調査の主体、目的、方法をめぐる議論の検討を軸に概観し、我々にさしあたりどのような印刷資料が残されて

\\Sonderheft 4, 1978, S. 197 ff. Dieter Langewiesche / Klaus Schönhoven, Zur Lebensweise von Arbeitern in Deutschland im Zeitalter der Industrialisierung, in: dies., *Arbeiter in Deutschland*, Paderborn 1981, S. 8 ff. 相馬保夫「西ドイツにおける最近の労働運動史研究。——テュンフェルデ『19世紀ルール地区労働者の社会史』を中心に」『史潮』新6号, 1979年, 112ページ以下。

7) 中鉢正美「生活構造変化の現代的課題」『三田学会雑誌』第5巻第10号, 1972年, 1ページ以下, 及び『生活古典叢書 7 家計調査と生活研究』光生館, 1971年, 所収の岡氏の解説を参照。

8) この分野の研究動向については、松村祥子「生活研究の一動向」『講座 現代生活研究 II 生活原論』ドメス出版, 1971年, 189ページ以下, を参照。

いるか、それらの資料をもとにどのような研究が可能かを考えてゆくことにしたい。

II 研究状況

すでに述べたところからも明らかなように、労働者家計の歴史を主題とする研究はきわめて少なく、まとまったものとしては後に紹介するシュナイダーの著書⁹⁾を入手しえたにすぎない。そこでこの問題をめぐる研究状況について検討を加えるべき本章では、賃金及び他の様々な形をとる収入と個々の消費支出の交錯点となっている家計に様々なレベルに関わりを持つ研究をフォローしつつ、家計史研究の果たすべき課題について考えることとしたい。

まず労働者の賃金についての研究から見てゆこう。現在、我々はこの点に関してはかなり整った統計を手に入れている。ホフマンによる1850年以降の産業部門別平均賃金から算出された勤労所得統計¹⁰⁾、ブライおよびデサイによる1871年以降の実質賃金統計¹¹⁾がそれである。また統計資料のきわめて不備な1860年以前については、賃金の穀物購買力を指数化した「穀物賃金 Kornlohn」を基礎データとして生活水準の変動を論じたザールフェルトの論文¹²⁾がある。これらの研究は、たしかに資料収集・批判の密度、方法上の統一性と厳密さにおいて、クチンスキーによる先駆的な労働者状態史研究¹³⁾を凌駕するものと言える。しかし反面そこには、クチンスキーに見られた統計資料と記述資料をつき合わ

9) Lothar Schneider, *Der Arbeiterhaushalt im 18. und 19. Jahrhundert*, Berlin-West 1967.

10) Walter G. Hoffmann, unter Mitarbeit von F. Grumbach und H. Hesse, *Das Wachstum der deutschen Wirtschaft seit der Mitte des 19. Jahrhunderts*, Berlin/Heidelberg/New York 1965, S. 456-500.

11) Gerhard Bry, *Wages in Germany 1871-1945*, Princeton 1960. Ashok V. Desai, *Real Wages in Germany 1871-1913*, Oxford 1968.

12) Dietrich Saalfeld, Lebensstandard in Deutschland 1750-1860. Einkommensverhältnisse und Lebenshaltungskosten städtischer Population in der Übergangsperiode zum Industriezeitalter, in: *Wirtschaftliche und soziale Strukturen im säkularen Wandel. Festschrift für Wilhelm Abel zum 70. Geburtstag*, Bd. III, Hannover 1974, S. 417 ff.

13) Jürgen Kuczynski, *Die Geschichte der Lage der Arbeiter unter dem Kapitalismus*, 38 Bde., Berlin-DDR 1961 ff., hier besonders Bd. 1-4.

せることにより生きた労働者像に迫ろうとする姿勢は欠如することになる。ただクチンスキーの場合にも、断片的な記述資料を窮乏化という色調でまとめあげるといった傾向のゆえに、地域、職種、熟練度などの相違に規定された階層性を孕む労働者の日常生活の実像を捉えられないという問題が存在する¹⁴⁾。

これらの研究はいずれも主として家計の収入面に力点を置いたものであるが、次にこれに対し、具体的な消費活動を扱った研究を取り上げる。18・19世紀のオーストリアにおける「消費社会」の形成史の解明を試みたザンドグラーバーが指摘するごとく、「工業化の経済史において、消費・需要面には、供給・生産面に比して、ごくわずかな注意しか向けられていない」¹⁵⁾のであるが、この問題への資料的手がかりはとりあえず、クチンスキーの『状態史』や最近出版された『日常生活史』¹⁶⁾に見出すことが出来る。さらに消費の個々の局面、とりわけ労働者層の食生活と住居が工業化によりどのような変容を受け、いかなる新たな問題に直面することになったかという点については、多くの興味深い研究¹⁷⁾が出ている。このうち特に住居問題は、都市化や居住区におけるコミュニケーションの問題等と結び合わされることにより、労働者の日常生活と政治行動との間に存する回路を探る好素材となっているが、我々の当初の関心からすれば、個々の消費活動を切り離して別々に問題とするのではなく、それらを一

14) クチンスキーの『状態史』への批判的コメントとして次を参照。Emile Bottigelli u. a., Eine Auseinandersetzung mit dem Werk von Jürgen Kuczynski, "Die Geschichte der Lage der Arbeiter unter dem Kapitalismus", Bd. 1-38, Akademie-Verlag, Berlin-DDR, 1961-1972, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, XIV, 1974, S. 471 ff.

15) Roman Sandgruber, *Die Anfänge der Konsumgesellschaft. Konsumgüterverbrauch, Lebensstandard und Alltagskultur in Österreich im 18. und 19. Jahrhundert*, Wien 1982, S. 10.

16) Jürgen Kuczynski, *Geschichte des Alltags des deutschen Volkes*, 5 Bde., Berlin-DDR 1980 ff., hier besonders Bd. 3-4.

17) 食生活については、Hans J. Teuteberg / Günter Wiegelmann, *Der Wandel der Nahrungsgewohnheiten unter dem Einfluß der Industrialisierung*, Göttingen 1972. Hans J. Teuteberg, Die Nahrung der sozialen Unterschichten im späten 19. Jahrhundert, in: Edith Heischkel-Artelt (Hrsg.), *Ernährung und Ernährungslehre im 19. Jahrhundert*, Göttingen 1976, S. 205 ff. また住居については、Lutz Niethammer (Hrsg.), *Wohnen im Wandel. Beiträge zur Geschichte des Alltags in der bürgerlichen Gesellschaft*, Wuppertal 1979. Lutz Niethammer unter Mitarbeit von Franz Brüggemeier, Wie wohnten Arbeiter im Kaiserreich?, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, XVI, 1976, S. 61 ff., を参照。

定の収入の枠をはめられた個別具体的な家計という枠の中で捉えることが必要となる。

以上の論点を一応まとめておくと、「労働者の社会史」研究の一貫としての労働者家計の歴史的研究が課題とするのは、国民経済の長期経済統計の一系列の整備、政策立案のための最低生活費、標準生計費の算出それ自体ではなく、あくまでも、複数の収入源を持ち、失業や病気に絶えず脅かされている具体的家計の実態解明であり、それら相互の消費行動の間に存する差異と同質性の検証作業であると言えよう。ただし種々の長期統計、計算上設定された平均的家計像、家計の類型化の試み等が、ここに言う個別具体的家計の位置を確認するための不可欠の手段となることは言うまでもない。

ところで1970年代半ば以降、労働者史への関心の高まりの中で、特定の地域、産業部門、企業の労働者についての事例研究が数多く出版されている。しかしそれらの著作の中で、単に労働者の賃金のみならず彼らの消費生活や家計を分析対象に組み込んだ研究はさほど多くはない。今のところそのような研究としては、ルール鉱山労働者をめぐるテンフェルデの研究、エスリンゲン機械工場の労働者についてのショメルスの研究、ヴェルテンベルクの繊維労働者を対象としたボルシャイトの研究等を手にしえたにすぎない¹⁸⁾。ここで目につくのは、職種や地域的・社会的出自を異にする様々な労働者グループの集合点であり、かつ労働者運動形成の舞台となった都市における労働者についての事例研究の少なさである。むしろ我々は比較的早い時期に出された、ケムニッツ、ハンプルク、マンハイムについての事例研究の内に、19世紀前半から中葉にかけての都

18) Klaus Tenfelde, *Sozialgeschichte der Bergarbeiterschaft an der Ruhr im 19. Jahrhundert*, Bonn-Bad Godesberg 1977. Heilwig Schomerus, *Die Arbeiter der Maschinenfabrik Esslingen. Forschungen zur Lage der Arbeiterschaft im 19. Jahrhundert*, Stuttgart 1977. Peter Borscheid, *Textilarbeiterschaft in der Industrialisierung. Soziale Lage und Mobilität in Württemberg (19. Jahrhundert)*, Stuttgart 1978. なおスイスの労働者についての次の研究は、家計の問題により大きなウェイトを置いている。Erich Gruner, *Die Arbeiter in der Schweiz im 19. Jahrhundert*, Bern 1968. Rudolf Braun, *Sozialer und kultureller Wandel in einem ländlichen Industriegebiet (Zürcher Oberland) unter Einwirkung des Maschinen- und Fabrikwesens im 19. und 20. Jahrhundert*, Stuttgart 1965.

市下層民ないし労働者層の家計をめぐる問題への関心を見てとることができ
る¹⁹⁾。

こうした研究上の空白を埋め、また個々の研究のなかに散在する労働者家計
の事例に分析上なんらかの有意な繋がりを持たせるためには、まず一定の時
系列の変化を観察し、特定時点の空間的比較、すなわち都市規模別や都市と農
村²⁰⁾間の比較を行なうための基軸を設定する必要があるだろう。本研究では、プロ
イセン王国、後にドイツ帝国の首都として、ドイツ社会の都市化、さらには労
働者運動の中心に位置することになるベルリン²¹⁾を、この基軸として設定する
ことにしよう。

以上、労働者の賃金や消費活動、さらには生活史等についての研究を概観し
つつ、労働者家計の歴史的研究の課題について考えてきたが、家計史研究その
ものがきわめて少ないという事実からしても、ここで家計史を研究対象とする
ことにどのような意味があるのかを、簡単にでも確かめておく必要があると思
われる。この点についてはドイツにおける「中流層・下層民」をめぐる社会史
的研究を続けてきたエンゲルジンの、18・19世紀の「生計 *Lebenshaltung*」問
題を扱った論稿²²⁾が多くの示唆を与えてくれる。彼によればこの「生計」とい

19) Rudolf Strauss, *Die Lage und die Bewegung der Chemnitzer Arbeiter in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*, Berlin-DDR 1960. Antje Kraus, *Die Unterschichten Hamburgs in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*, Stuttgart 1965. Peter Kühn, *Materialien zu einer Geschichte der Mannheimer Unterschichten in der Zeit von 1825-1862 (1871)*, Bern und Frankfurt/M. 1974. 最近の研究で例外的に目についたものとして、David F. Crew, *Town in the Ruhr. A Social History of Bochum, 1860-1914*, New York 1979, がある。また、Hartmut Zwahr, *Zur Konstituierung des Proletariats als Klasse. Strukturuntersuchung über das Leipziger Proletariat während der industriellen Revolution*, Berlin-DDR 1978, はライプツィヒにおける労働者階級の形成史を経済的、社会的、政治的側面の相互関連の中で検討したすぐれた研究であるが、婚姻関係を軸にした家族関係の豊富な分析に比し、家計をめぐる問題にはほとんど関心が向けられていない。

20) 19世紀の農村労働者の生活実態をマグデブルク周辺地域の事例に即して民俗学の視点から検討したものに、Hainer Plaul, *Landarbeiterleben im 19. Jahrhundert*, Berlin-DDR 1979, がある。

21) ベルリンの労働者についての邦語の事例研究として、坪郷 実「ドイツ第二帝制末期の『労働者像』への接近(一)——ベルリン緩城工業——」『法政論集』(北九州大学)第9巻 第1号, 昭和56年, 1ページ以下がある。なお1840年代については、拙稿「革命前夜のベルリン労働者」良知 力編『共同研究 1848年革命』大月書店, 1979年, 70ページ以下, を参照されたい。

う概念は、「社会的状況を異にする諸個人、諸家族の肉体的な生命維持 *physische Lebenserhaltung* と社会文化的な生活形成 *sozialkulturelle Lebensgestaltung*」という二つの要素から構成されているが、この両者は「異種の分離可能な複合体」をなしているのではない。むしろ、「通常、肉体的な生存を維持する手段によって、同時に社会文化的な生活形態が表現されている」のである²³⁾。ではこのように規定された「生計」概念を手がかりとして、18・19世紀のドイツについてどのような歴史像が得られるだろうか。

エンゲルジnkのこの論文を、市民層と労働者層の「生計」ないし生活様式の変化に的を絞って大雑把にまとめてみよう²⁴⁾。まず18世紀の両者の「生計」を等しく支配したモデルとして、彼は既述のブルンナーにならって「貴族領主および家父」を担い手とする「全き家の家政」をあげる(S. 12 f.)。そしてこのモデルが、18世紀末から19世紀前半の経済的・社会的発展を通じて「現金収入と消費に縮小された市民的都市的家計」モデルへと転換してゆく背景として、もともと都市貴族的地位を占め「全き家」の担い手でもあった上層市民を除く市民層の生活様式が、その「貴族的、都市貴族の上流層への同化」と「下層民からの隔絶」という二重のモメントに規定されて変化しはじめたことがあげられる(S. 16)。つまり、「商人的企業家層」の生活様式は上流層の生活様式への追従と利潤再投資という二つの方向の間を揺れ動き、「市民大衆 *Masse des Bürgertums*」は下層民と自己を区別すべく、「儉約」に基づき「身分相応 *standesgemäß*」の市民的「生計」を追求しつつ、同時に「教育への思い切った支出」によって自己の存在を誇示するのである(S. 17 f.)。一方この19世紀前半の時点では、労

22) Rolf Engelsing, Probleme der Lebenshaltung in Deutschland im 18. und 19. Jahrhundert, in: ders., *Zur Sozialgeschichte deutscher Mittel- und Unterschichten*, Göttingen 1973, S. 11 ff.

23) *Ebd.*, S. 11.

24) 以下、本論文からの引用は本文中にページ数のみを記入して示す。シュルツェ＝デーリッチュに代表される自由主義者の社会政策論の意義と限界を論じつつ、このエンゲルジnk論文を紹介したものとして、坂井榮一郎「シュルツェ＝デーリッチュ、フェルディナント・ラサール、そしてヘルマン・ワーゲナー——プロイセン憲法紛争期ドイツ自由主義の『第三身分』的社会政策思想をめぐって——」柴田他編『近代史における政治と思想』山川出版社、昭和52年、285ページ以下、がある。

働者層は領主権、家父長権の支配から解放され独自の「家族的家計 Familienhaushalt」を持ったものの、大部分はいまだ「かなり均一な不熟練労働者層」をなしている（S. 19-21）。だが19世紀中葉以降の経済成長に伴いこの不熟練労働者層の実質賃金が上昇することによって、彼らの間に階層区分が生じ、この内の「上層労働者」がこれまで「下層中流層」に属していた「非独立手工業者」と結合し、労働者組織の主導権を握るに至る（S. 22）。こうして全体として労働者と市民層の接近がかえって、「市民層とプロレタリアートの間の危機的かつ葛藤を孕んだ隔絶の前提」を生み出すなかで、「上層労働者」は市民層の生活様式への同化（ブルジョア化）を図るが、市民層がこれを身分制的視点から「風紀紊乱」と捉え拒絶したため、両者の対立は「支配する資本主義と支配をめざす社会主義との間のイデオロギー対立」にまで登りつめてゆくことになる（S. 22-24）。

さてこうしたエンゲルジnkの解釈の当否については、労働者層の階層区分の問題や手工業職人の位置付け²⁵⁾をはじめ、議論すべき余地が残されているが、家計史研究を広い歴史的文脈におくことによって、それが社会史研究のなかで持ちうる意義を明らかにしていることは確かであろう。具体的家計の歴史的分析により、彼のテーゼがどこまで裏付けられるのかを検討することは我々自身に課せられた課題であるが、彼の論文の検討からひとまず明らかになったのは、その際、労働者層内部の階層性、他の社会層、とりわけ市民層との比較を念頭においた分析が求められているという点である。

こうした観点からすると、既述のシュナイダーの著作は、我々の問題意識に
応えてくれるものとはいいがたい。すなわち本書は、「1700年から1913年の間
に、工業化の影響の下で労働者層の家計構造および家計行動にいかなる変化が
生じたか」²⁶⁾を明らかにすることを課題として掲げ、ドイツの労働者家計につ
いての豊富な資料を提示してはいるが、家内工業から工場制へのあまりにも直

25) この問題については、拙稿「ドイツ三月前期の『職人労働者』」『経済学論叢』（同志社大学）第29巻第5・6号、1981年、25ページ以下、を参照。

26) Lothar Schneider, *a. a. O.*, S. 11.

線的な発展説を採り、地域的特性、労働者層内部の階層性といった分析視角を欠いているため、全体として家庭経済ないし消費経済という狭いプロパーでの関心にしか対応しえないものとなっているのである。

こうした研究状況にあって、最近ようやく「労働者の社会史」研究を標榜する研究者の間で、労働者家計の歴史的研究への糸口が模索され始めた。いずれも短い論稿ではあるが、家計史研究から労働運動史研究へのアプローチの可能性を探ったテンフェルデ論文²⁷⁾、ドイツ第二帝制期の労働者家族についての資料集に付された序文、解説²⁸⁾、次章で取り上げる20世紀初頭の家計調査報告の復刻版に寄せたフレミングおよびヴィットの序文²⁹⁾がそれである。なかでも個別的家計事例からの性急な一般化への警告としてテンフェルデが指摘した、(1)家計をめぐる大きな地域差、とりわけ首都・工業都市と農村の間の差違、具体的には個々の支出項目の構成上の差違、(2)支出行動の規定要因としての個々の階層独自の規範の存在、(3)労働の場における技術革新のテンポに比して緩慢な家計行動の変化、という諸点³⁰⁾は本稿における家計史研究の課題設定にも大きな示唆を与えている。

これらの論文は各々、労働者ないし労働者家族の日常生活の実態解明のための研究が従来のドイツの歴史学ではほとんど行なわれてこなかったとして、この領域の研究に対するイギリスやフランスの社会史研究からのインパクトを指摘しながら、同時に共通して、19世紀から20世紀初頭のドイツの社会科学研究の

27) Klaus Tenfelde, Arbeiterhaushalt und Arbeiterbewegung 1850-1914, in: *Sozialwissenschaftliche Informationen für Unterricht und Studium*, Jg. 6, Heft 4, 1977, S. 160 ff., 185 ff.

28) Klaus Saul u. a. (Hrsg.), *Arbeiterfamilien im Kaiserreich. Materialien zur Sozialgeschichte in Deutschland 1871-1914*, Königstein / Düsseldorf 1982, S. 1-4, 71-82.

29) Jens Flemming und Peter-Christian Witt, Einkommen und Auskommen "minderbemittelter Familien" vor dem 1. Weltkrieg. Probleme der Sozialstatistik im Deutschen Kaiserreich, in: *Erhebung von Wirtschaftsrechnungen minderbemittelter Familien im Deutschen Reich, bearbeitet im Kaiserlichen Statistischen Amte, Abteilung für Arbeiterstatistik, Berlin 1909* (以下 *Erhebung* と略記). *Haushaltsrechnungen von Metallarbeitern, bearbeitet und herausgegeben vom Verband des Deutschen Metallarbeiter-Verbandes, Stuttgart 1909* (以下 *320 Haushaltsrechnungen* と略記). Nachdruck, hrsg. v. Dieter Dowe, Berlin / Bonn 1981, S. V ff. (これは上の両報告を合本した復刻版である。)

30) Klaus Tenfelde, a. a. O., S. 162 f.

伝統の中に、現在の社会史研究と重なり合う問題意識、さらには今後の研究上の資料的基盤を見い出している³¹⁾。そこで本稿でも章を改め、19世紀から20世紀初頭にかけてドイツにおいて積み重ねられてきた社会科学、とりわけ社会統計学の研究・調査の中から家計に関するものを取り出し、家計調査をめぐってどのような方法論上の議論がなされてきたかを検討することにしよう。そしてそれとともに、本章で設定した家計史研究の三つの課題、すなわち(1)具体的家計を対象としこれを出来る限り広い社会文化的な問題領域との関連で考察すること、(2)ベルリンを基軸に、家計の時系列の変化、地域的差違の比較検討を行うこと、(3)家計に現われる労働者層内部、および労働者層と他の社会層の間の差違を検討すること、という三点を、これら19世紀の社会調査から得られる資料によって、どの程度まで追求しうるかを考えてみたい。

III 19世紀ドイツにおける労働者家計の調査

1 概 観

19世紀から20世紀初頭にかけてのドイツにおける労働者家計調査史は、三つの時期に分かつことができる³²⁾。

まず第一期は、ドイツにおける「家計統計の黎明期」とでも言うべき時期で、通例、この時期を代表する調査として、1848年にプロイセン王立農村経済審議会の手で行われた農村労働者の状態調査³³⁾があげられる。しかしこの調査に先

31) *Ebd.*, S. 160 f., Saul u.a., a. a. O., S. 2, Jens Flemming u.a., a. a. O., S. VI f. なおこうした指摘は我国では決して新しいものではない。最近の論文として、藤澤 治「第二帝政期ドイツにおける労働力の形成——労働力市場の深化・拡大——」『社会経済史学』第48巻第4号、昭和57年、1ページ以下、同「ドイツにおける階級形成=社会的移動論の展開——第一次大戦前後の論争を中心に——」『思淵』710号、1983年、28ページ以下、を参照。

32) 以下の時期区分は、Gerhard Albrecht, *Haushaltsstatistik. Eine literarhistorische und methodologische Untersuchung*, Berlin 1912, S. 10-62, の叙述に拠る所が多い。

33) Alexander v. Lengerke (Hrsg.), *Die ländliche Arbeiterfrage. Beantwortet durch die bei dem Königl. Landes-Oeconomie-Collegium aus allen Gegenden der preußischen Monarchie eingegangenen Berichte landwirtschaftlicher Vereine über die materiellen Zustände der arbeitenden Classen auf dem platten Lande*, Berlin 1849, がその調査報告である。なおこの時期前後のドイツおよびヨーロッパ各国の家計調査については、Ernst Engel, *Die Lebenskosten Belgischer Arbeiterfamilien früher und jetzt*, Dresden 1895, S. 16ff., 森戸辰男訳『ベルグ

第1表 ベルリン労働者の賃金及び賃金指数 (1847-1912年)

(日給の最低, 最高額, 単位はマルク, 1912年=100)

| 1 | 2 | | | | 3 | | | | 4 | | | | 5 | | | |
|------|--------|----|------|----|--------|----|------|----|-------|-------|------|----|------|----|------|----|
| 年 | 不熟練労働者 | | | | 半熟練労働者 | | | | 工場労働者 | | | | 手工業者 | | | |
| | 賃金 | 指数 | 賃金 | 指数 | 賃金 | 指数 | 賃金 | 指数 | 賃金 | 指数 | 賃金 | 指数 | 賃金 | 指数 | 賃金 | 指数 |
| 1847 | | | 1.40 | 31 | | | | | | | | | | | | |
| 1848 | | | 1.50 | 33 | 1.50 | 33 | 1.75 | 37 | 1.50 | (100) | 1.75 | 32 | | | 2.50 | |
| 1849 | | | 1.40 | 31 | 1.50 | | 1.75 | | | | 1.75 | | | | 2.50 | |
| 1850 | | | 1.40 | | 1.50 | | 1.75 | | | | 1.75 | | 2.25 | 40 | 2.50 | 40 |
| 1851 | | | 1.40 | | 1.50 | | 1.75 | | | | 1.75 | | 2.25 | | 2.50 | |
| 1852 | | | 1.40 | | 1.50 | | 1.75 | | | | 1.75 | | 2.25 | | 2.50 | |
| 1853 | | | 1.40 | | 1.50 | | 2.00 | 43 | 1.75 | (117) | 2.00 | 36 | 2.25 | | 2.50 | |
| 1854 | | | 1.40 | | 1.50 | | 2.00 | | 1.75 | | 2.00 | | 2.25 | | 2.20 | 35 |
| 1855 | | | 1.40 | | 1.50 | | 2.00 | | 1.75 | | 2.00 | | 2.25 | | 2.50 | 40 |
| 1856 | | | 1.40 | | 1.50 | | 2.00 | | | | 2.00 | | 2.25 | | 2.50 | |
| 1857 | | | 1.50 | 33 | 1.50 | | 2.00 | | | | 2.00 | | 2.25 | | 2.50 | |
| 1858 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.00 | | | | 2.00 | | 2.25 | | 2.50 | |
| 1859 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.00 | | | | 2.00 | | 2.25 | | 2.50 | |
| 1860 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.00 | | | | 2.00 | | 2.25 | | 2.50 | |
| 1861 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.00 | | | | 2.00 | | 2.25 | | 2.50 | |
| 1862 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.00 | | 2.00 | (133) | 2.25 | 41 | 2.25 | | 2.75 | 44 |
| 1863 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.00 | | | | 2.25 | | 2.25 | | 2.75 | |
| 1864 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.00 | | | | 2.25 | | 2.25 | | 2.75 | |
| 1865 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.00 | | 2.40 | (160) | 2.50 | 45 | 2.25 | | 2.75 | |
| 1866 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.25 | 48 | 2.40 | | 2.50 | | 2.25 | | 3.00 | 48 |
| 1867 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.25 | | 2.40 | | 2.50 | | 2.25 | | 3.00 | |
| 1868 | | | 1.50 | | 1.50 | | 2.25 | | 2.40 | | 2.50 | | 2.25 | | 3.00 | |
| 1869 | | | 1.75 | 39 | 2.00 | 44 | 2.50 | 53 | 2.25 | (150) | 2.75 | 50 | 2.25 | | 3.00 | |
| 1870 | | | 2.00 | 44 | 2.25 | 50 | 2.80 | 60 | 2.25 | | 2.75 | | 2.25 | | 3.25 | 52 |
| 1871 | 2.25 | 52 | 2.50 | 56 | 2.75 | 61 | 3.30 | 71 | 2.75 | (183) | 3.50 | 64 | 3.25 | 58 | 3.75 | 60 |
| 1872 | 2.25 | | 2.50 | | 2.75 | | 3.30 | | 3.00 | (200) | 3.80 | 69 | 3.50 | 63 | 4.25 | 67 |
| 1873 | 2.25 | | 2.50 | | 2.75 | | 3.30 | | 3.00 | | 3.80 | | 3.50 | | 4.25 | |
| 1874 | 2.20 | 51 | 2.30 | 51 | 2.40 | 53 | 3.00 | 64 | 2.80 | (187) | 3.60 | 65 | 3.00 | 54 | 4.00 | 63 |
| 1875 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-------|------|-----|------|-----|------|-----|
| 1876 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1877 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1878 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1879 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1880 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1881 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1882 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1883 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1884 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1885 | 2.20 | | 2.30 | | 2.40 | | 3.00 | | 2.80 | | 3.60 | | 3.00 | | 4.00 | |
| 1886 | 2.20 | | 2.50 | 56 | 2.50 | 56 | 3.40 | 73 | 3.00 | (200) | 4.00 | 73 | 3.00 | | 4.50 | 71 |
| 1887 | 2.20 | | 2.50 | | 2.50 | | 3.40 | | 3.00 | | 4.00 | | 3.00 | | 4.50 | |
| 1888 | 2.20 | | 2.50 | | 2.50 | | 3.40 | | 3.00 | | 4.00 | | 3.00 | | 4.50 | |
| 1889 | 2.20 | | 2.50 | | 2.50 | | 3.40 | | 3.00 | | 4.00 | | 3.00 | | 4.50 | |
| 1890 | 2.50 | 53 | 2.80 | 62 | 3.00 | 67 | 3.50 | 75 | 3.50 | (233) | 4.50 | 82 | 4.25 | 76 | 4.50 | |
| 1891 | 2.50 | | 2.80 | | 3.00 | | 3.50 | | 3.50 | | 4.50 | | 4.25 | | 4.50 | |
| 1892 | 2.50 | | 2.80 | | 2.50 | 56 | 3.50 | | 3.50 | | 4.50 | | 4.25 | | 4.50 | |
| 1893 | 2.50 | | 2.80 | | 2.50 | | 3.50 | | 3.50 | | 4.50 | | 4.25 | | 4.50 | |
| 1894 | 2.50 | | 2.80 | | 2.50 | | 3.50 | | 3.50 | | 4.50 | | 4.25 | | 4.50 | |
| 1895 | 2.50 | | 2.80 | | 2.50 | | 3.50 | | 3.50 | | 4.50 | | 4.25 | | 4.50 | |
| 1896 | | | 3.50 | 78 | 3.50 | 78 | 3.70 | 79 | | (233) | 5.00 | 91 | 4.25 | | 4.75 | 75 |
| 1897 | | | 3.50 | | 3.50 | | 3.70 | | | ↓ | 5.00 | | 4.50 | 81 | 5.00 | 79 |
| 1898 | | | 3.50 | | 3.50 | | 3.70 | | | (1840 | 5.00 | | | | 5.00 | |
| 1899 | | | 3.50 | | 3.50 | | 3.70 | | | = | 5.50 | 100 | | | 5.00 | |
| 1900 | 3.80 | 88 | 4.00 | 89 | 4.00 | 89 | 4.20 | 90 | | (100) | 5.50 | | 5.00 | 90 | 5.50 | 87 |
| 1901 | 3.80 | | 4.00 | | 4.00 | | 4.20 | | | | 5.50 | | 5.30 | 95 | 5.50 | |
| 1902 | 3.80 | | 4.00 | | 4.00 | | 4.20 | | | | 5.50 | | | | 5.50 | |
| 1903 | 3.80 | | 4.00 | | 4.00 | | 4.20 | | | | 5.50 | | | | 5.50 | |
| 1904 | 3.80 | | 4.00 | | 4.20 | 93 | 4.50 | 96 | | | 5.50 | | | | 5.50 | |
| 1905 | 4.00 | 93 | 4.20 | 93 | 4.20 | | 4.50 | | | | 5.50 | | | | 5.50 | |
| 1906 | 4.00 | | 4.20 | | 4.20 | | 4.50 | | | | 5.50 | | | | 5.50 | |
| 1907 | 4.00 | | 4.20 | | 4.20 | | 4.50 | | | | 5.50 | | | | 5.50 | |
| 1908 | 4.05 | 94 | 4.23 | 94 | 4.23 | 94 | 4.50 | | | | 5.50 | | | | 5.58 | 89 |
| 1909 | 4.05 | | 4.23 | | 4.23 | | 4.50 | | | | 5.50 | | 5.58 | 100 | 6.03 | 96 |
| 1910 | 4.05 | | 4.23 | | 4.23 | | 4.50 | | | | 5.50 | | 5.58 | | 6.03 | |
| 1911 | 4.32 | 100 | 4.50 | 100 | 4.50 | 100 | 4.68 | 100 | | | 5.50 | 100 | 5.58 | | 6.03 | |
| 1912 | 4.32 | 100 | 4.50 | 100 | 4.50 | 100 | 4.68 | 100 | | | 5.50 | 100 | 5.58 | 100 | 6.30 | 100 |

立って、1840年代中葉にはレーデンを中心とした広汎な労働者家計の調査が存在する。これは、従来の家計調査史においてはほとんど言及されていないが、社会統計資料のきわめて不備な時代の調査として我々には貴重な資料である。

1850年代になると、1853年ブリュッセルで開かれた第一回国際統計会議を契機に、デュクプティエの『ベルギーにおける労働者階級の家計』(Edouard Ducpetiaux, *Budgets économiques des classes ouvrières en Belgique*, 1855) や、ル・プレーの『ヨーロッパの労働者』(Frédéric Le Play, *Les ouvriers européens*, 1855) といった、家計調査・研究史上画期的な著作が相次いで出版され、1870年以降に第二の発展期をむかえるドイツの家計調査にも大きな影響を与える。この時期には、上の両者の仕事をどう評価するかを一つの争点として家計調査の方法が議論される一方、少数の個別・具体的な家計を対象にした聞き取り、またはアンケート調査に基づく「家計モノグラフィー」や、その他様々な家計調査の試みが出版された。

そして続く第三期には、この第二期の様々な試行錯誤の中から確立されてきた、家計簿を基礎資料とする「本来の家計計算」法に基づき、官庁を主体とする最初の大規模な家計調査(1907年)が実施されるに至る。

以下これらの三つの時期——大雑把に言うると各々ほぼ、工業化初期のパウベリズム(大衆的貧困)期、1850・60年代の経済成長の「スパート」期に続く「大不況」期、そして19世紀末からの独占への移行期に対応する——について個々に検討を加えるが、その前にここでそのための予備知識として、いくつかの統計上の基礎データを提示しておくことにしよう。

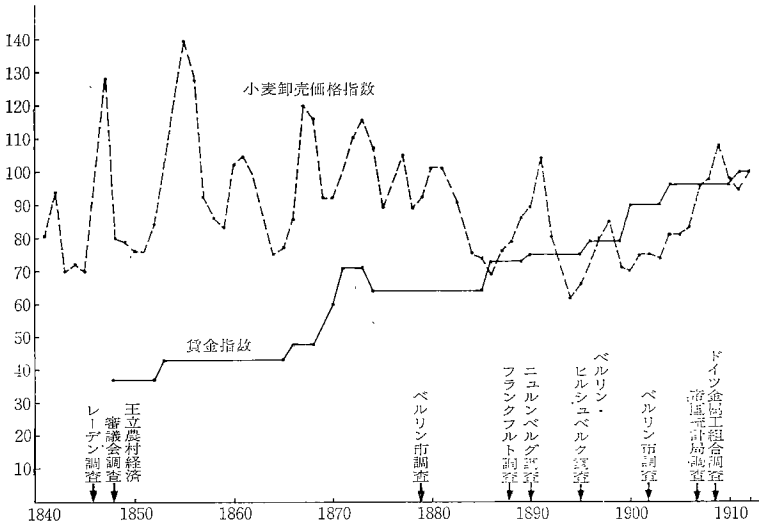
まず第1表および第1図には、前章で様々なレベルの家計事例の比較の基軸に設定したベルリンについてのデータをあげる。第1表の賃金統計³⁴⁾は、1847年に開設されたベルリン市営ガス工場に働く労働者の日給の最低・最高額を示したものであるが、その資料的意義は、長期にわたり同一工場内の熟練度を異

「ギー労働者家族の生活費」第一出版、昭和43年、39ページ以下、を参照。

34) 資料の出所は、Fritz Schmidt, *Einfluss technischer Fortschritte auf die Arbeits- und Lohnverhältnisse in den Berliner städtischen Gasanstalten*, Berlin 1919, S. 128-132.

第1図 ベルリンにおける賃金・小麦卸売価格指数1814-1912 (=100)

（付：主要家計調査年）



にする労働者の賃金の変動が記録されている点にある。表中に言う熟練労働者は構内作業員 (Hofarbeiter), 半熟練労働者は浄化作業員 (Reinigungsarbeiter), 工場労働者とは加熱炉作業員 (Arbeiter vor den Oefen), 手工業者はレンガ積工 (Maurer) を指している。労働時間は、工場労働者が1847年から1906年まで12時間、それ以降は8時間であり、その他の労働者の場合は1871年まで実働11時間、1872年から1906年までが10時間、以降は9時間となっている。

次に第1図は、個々の家計調査の行なわれた年の家計をめぐる諸状況の一端を明らかにするため、ベルリンにおける小麦の卸売価格指数と賃金指数³⁵⁾を図

35) 小麦の卸売価格指数は、Die Getreidepreise in Deutschland seit dem Ausgang des 18. Jahrhunderts. Mit Anhang: Getreidepreise in Berlin seit 1624, in: *Vierteljahrshefte zur Statistik des Deutschen Reichs*, hrsg. vom Statistischen Reichsamt, 44. Jg., 1935, I. Heft, S. 296, 298, から取った。なお基準年として計算し直してある。また賃金指数は、第1表の半熟練労働者の日給の上限額を指数化したものである。

第2表 英・独・仏における労働者家族の食費・生計費指数(1825-1910年)

| 年 次 | イギリス 食費指数 (1825~1830=100) | ドイツ 食費指数 (1825~1830=100) | | 年 次 | フランス 生計費指数 (1830=100) |
|-----------|---------------------------------|-----------------------------|--------------|------|-----------------------------|
| | | プロイセン 平均 価 格 | ミュンヘン 価 格 | | |
| 1826~1830 | 100 | 100 | 100 | 1830 | 100 |
| 1831~1835 | 87.9 | 107.2 | 105.5 | | |
| 1836~1840 | 93.9 | 105.8 | 116.5 | 1840 | 101.2 |
| 1841~1845 | 84.9 | 117.1 | 122.8 | | |
| 1846~1850 | 83.9 | 132.1 | 137.0 | 1850 | 102.4 |
| 1851~1855 | 86.9 | 159.7 | 137.4 | | |
| 1856~1860 | 88.9 | — | 127.0 | 1860 | 114.4 |
| 1858~1865 | 64.0 | 155.8 | — | | |
| 1861~1865 | — | — | 147.0 | | |
| 1866~1870 | — | — | 141.3 | 1870 | 123.4 |
| 1866~1872 | 73.6 | 186.6 | — | | |
| 1871~1875 | — | — | 189.0 | | |
| 1873~1880 | 79.3 | 205.9 | — | | |
| 1876~1880 | — | — | 200.0 | 1880 | 131.7 |
| 1881~1885 | 70.9 | 194.4 | 188.6 | | |
| 1886~1890 | 63.4 | 184.0 | 199.4 | 1890 | 123.4 |
| 1891~1895 | 59.1 | 194.6 | 197.0 | | |
| 1896~1900 | 54.6 | 185.5 | 203.3 | 1900 | 119.8 |
| 1901~1905 | 57.8 | 196.8 | 203.5 | 1906 | 118.6 |
| 1906~1910 | 60.2 | 224.9 | 217.7 | 1910 | 124.6 |

注：基準年を資料の1896-1900年ないし1900年から表記の年に変えて計算し直した。

表化したものである³⁶⁾。さらに第2表では、イギリス、ドイツ、フランス三国の労働者家族の食費・生計費指数³⁷⁾が示されている。このうちイギリスの指数は食

36) なお、W. Fischer u. a., *Sozialgeschichtliches Arbeitsbuch I. Materialien zur Statistik des Deutschen Bundes 1815-1870*, München 1982, G. Hohorst, u. a., *Sozialgeschichtliches Arbeitsbuch. Materialien zur Statistik des Kaiserreichs 1870-1914*, München 1975, の各第III章には、賃金、物価、生計費、家計事例等、本稿に関係する多くの統計データが収録されている。

37) 典拠は、Carl von Tyszka, *Lebenskosten deutscher und westeuropäischer Arbeiter früher und jetzt*, in: *Schriften des Vereins für Sozialpolitik*, 145. Bd., III. Teil: Löhne und Lebenskosten in Westeuropa im 19. Jahrhundert (Frankreich, England, Spanien, Belgien), München und Leipzig 1914, S. 274 f.

費指数(1856/60年まではパンの小売価格指数)、ドイツの指数はプロイセン平均価格およびミュンヘン価格に基づき、年間消費量を一定と仮定して計算された食費指数、フランスの指数は食費に光熱費、家賃を加えた生計費指数である。第2表に示された指数は全体として、イギリスにおける顕著な低下、フランスの緩やかな上昇、ドイツの大幅な上昇傾向を明らかにしており、19世紀後半のドイツにおいて家計問題に高い関心が寄せられた理由の一端を窺わせている。これらの統計的データを分析するにあたっては、本来、個々のデータの集計法等につきより詳細な注解が必要であるが、ここではそれを省略し一応の近似的トレンドを見るにとどめ、本章の本来の課題である19世紀ドイツにおける労働者家計の調査史の検討へと進むことにしよう。

2 19 世紀 中 葉

レーデン Friedrich Wilhelm Freiherr von Reden (1804-1857) は、従来のドイツ統計史の中でも同時代のプロイセン統計局長ディーテリツィらに比べ、名前をあげられることのほとんどない統計家の一人である³⁸⁾。1804年、リッペのヴェントリンクハウゼンに生まれたレーデンは、ハノーファー王国、ベルリン・シュテットティン鉄道会社に奉じた後、1844年プロイセン外務省に商工業問題担当の大臣直属官の地位を得、同年8月に開会された第一回ドイツ連邦工業博覧会中央委員会のメンバーとなり、博覧会の準備、運営、報告書作成に携わった³⁹⁾。この博覧会は一面ではドイツの工業化の進展を華々しく誇示したものであったが、他方そこには工業化に付随した社会問題が大きな影を落としていた。「手労働者および工場労働者の倫理的、経済的状況の改善は、現代の緊急

38) 彼の残した統計関係の出版物としては次のようなものがある。Erwerbs- und Verkehrs-Statistik des Königsstaats Preußen, 3 Bde., Darmstadt 1853f. Deutschland und das uebrige Europa. Handbuch der Bodens-, Bevölkerungs-, Erwerbs- und Verkehrs-Statistik, 2 Bde., Wiesbaden 1854.

39) この博覧会については、高橋秀行『『三月前期』のプロイセン工業博覧会』〔1〕,〔2〕,〔3〕,『大分大学経済論集』第30巻 第5号,1978年,第31巻 第5号,1979年,同第6号,1980年,また中央委員会については同論文〔2〕,31ページ以下,を参照。

かつきわめて重要な課題である」という認識に基づいて起草された、1844年10月7日付の「手労働者および工場労働者の福祉のための協会結成の呼びかけ」⁴⁰⁾に、我々はこの「影」の一端を見ることができる。

さてこの呼びかけへの署名者の一人となったレーデンは、1846年に至り「ドイツの国土、国家および国民生活の状況を統計的に認識するために、分散した資料を収集、整理、加工のうえ公表すること」を目的とした「ドイツ統計協会」を設立し⁴¹⁾、労働者の状態、とりわけその家計状況についての広汎な調査に着手した。彼の調査の記録として現在我々は二つの資料を手に入れている。一つはこの協会が発行した雑誌にドイツ各地から寄せられた報告⁴²⁾であり、今一つは、1846年秋にレーデンがプロイセン王立海外貿易会社総裁ローターに依頼して行なった、同貿易会社所属の工場における労働者の状態に関する調査記録⁴³⁾である。

この二つの資料から我々は、レーデンが彼の一連の調査を統一的に実施しようとしていたことを読みとることができる。すなわち第一に、調査への回答の

40) Aufruf zur Bildung eines Vereins für das Wohl der Hand- und Fabrikarbeiter vom 7. Oktober 1844, in: *Mittheilungen des Centralvereins für das Wohl der arbeitenden Klassen*, Bd. 1, Berlin 1848/49 (unveränderter Neudruck, Hagen 1980), S. 7 ff.

41) *Zeitschrift des Vereins für deutsche Statistik* (以下 *Zeitschrift* と略記), Jg. 1, Berlin 1847, S. 1 f.

42) 例えば, Frhr v. Reden, Vergleichende Zusammenstellung der Preise der notwendigsten Lebensbedürfnisse der handarbeitenden Volksklassen in Hamburg, Bremen, Lübeck und Frankfurt a. M., in: *Zeitschrift*, Jg. 1, S. 1038 ff. Verhältnisse der handarbeitenden Bevölkerung in Wien, von einem Bewohner Wiens, in: *Zeitschrift*, Jg. 2 (1848), S. 177 ff., といった論稿がある。

43) この手稿史料は現在、西ベルリンの Geheimes Staatsarchiv (Preußischer Kulturbesitz)——以下 GSTA と略記——に保管(資料請求番号は Rep. 109, 3641)されている。なおこれら一連の報告のうちベルリン・モアビート工場からのものは、拙稿「プロイセン王立海外貿易会社機械製造・鑄鉄工場(ベルリン・モアビート)における労働者の状態」『史学雑誌』第87編第6号, 1978年, 54ページ以下, において紹介したことがある。また, Christian Rother, *Nachtrag zu Denkschrift vom 18ten Februar 1845 über die Verhältnisse des Königlichen Seehandlungs-Instituts*, Berlin 1847, S. 13-27, 所収の表“Zusammenstellung von Angaben über die Lage und Verhältnisse der bei den Fabriken=Etablissements der Seehandlung beschäftigten Arbeiter”(jetzt nachgedruckt in: Wolfgang Radtke, *Die preussische Seehandlung zwischen Staat und Wirtschaft in der Frühphase der Industrialisierung*, Berlin-West 1981, S. 379 ff.), は, Rep. 109, 3641, Bl. 9-13, の表と一致しているが, 原史料に見られる総収入, 支出内訳の項は省略されている。この時期の王立海外貿易会社の工場経営をめぐる問題については, 肥前栄一『ドイツ経済政策史序説』未来社, 1973年, 143ページ以下, を参照。

依頼対象は「工場主」ないしそれに近い「管理者」とされ、従って労働者の家計状況についてのデータは彼らの推計に基づくものとなっている。この点についてレーデン自身は、1846年9月10日付のローターあて書簡において次のように書いている：「すでにドイツの約百名の工場主たちから（労働者の状態につき）報告を受けておりますが、これと同様の報告を、王立海外貿易会社に属する全工場につき入手できますならば、誠に幸甚に存じます。」⁴⁴⁾

第二に、上に言う「同様の報告」とは、具体的には次の七項目についての回答を意味していた。すなわち(1)地域、男女、年齢、職業別の賃金(日給で表示)、(2)日給の構成(現金か現物給付か)、(3)一日の労働時間と年間労働日数、(4)労働者およびその家族の副業収入、(5)公租公課額、(6)「食 Haushalt, 衣, 住」等への支出額、(7)生活必需品の小口買いによる損失、の七項目である⁴⁵⁾。これらの諸点がレーデンの「工場主」層へのアンケート調査の質問表のモデルとなっていたであろうことは、『統計協会雑誌』の諸報告⁴⁶⁾からも推察されうる。

しかしこうしたレーデンの試みにもかかわらず、アンケートへの回答状況は、現在残されている資料を見る限り決して満足のゆくものではなかったと思われる。レーデンの依頼を受諾したローターからの通達で上記諸項目についての報告書の提出を求められた王立海外貿易会社の各工場からの回答(計14通)を見ても、ベルリン・モアビート工場のきわめて整った報告は例外で、家計支出状況についての報告を不十分にでも行なっているのは、エルドマンズドルフの亜麻紡績工場、プレスラウ機械工場、オーラウ、ボイテン、ブロムベルクの各製粉所にすぎないのである。とはいえこの種の統計の不備なこの時代にあって、上述のアンケート項目のみならず、食料品への課税の実態、公的扶助(救恤金受給

44) Ebd., Bl. 1.

45) Ebd., Bl. 1-2. なお回答の具体例として、前掲拙稿(1978年)に引用した史料1, 2, を参照。

46) 一例として, Frhr. v. Reden, Beantwortung der von mir gestellten Fragen über die Verhältnisse der Handarbeit und die Arbeitslöhne im Herzogthum Lauenburg, in: *Zeitschrift*, Jg. 1. S. 658 ff., をあげておく。

者)の増減等々にも目をむけたレーデンの調査が、労働者家計の歴史に関心を持つ我々に、多くの貴重なデータを提供していることは言うまでもない。そしてレーデンのこうした広汎な調査を促した要因として、彼がこの時代の貧困の原因を単に「食料不足」に求めるのではなく、それを「生業不足 *Erwerbsmangel*」に起因する「大衆貧困 *Massenverarmung*」として認識していた点⁴⁷⁾を忘れてはなるまい。

ところで第3表は、19世紀ドイツの家計調査史上の三つの時期の労働者家計の事例から、一応前章で設定した研究課題(ベルリンを軸にした時間的、空間的、階層的比較)に対応するように、数例ずつをピック・アップし、収入、支出構成を示したものである⁴⁸⁾。この表自体はあくまでもサンプルの例示を目的としたものであり、個々の時期の労働者家計の詳しい分析は別稿に譲らざるを得ないが、各時期の家計調査方法の変化や労働者家計の特徴の大雑把な把握の素材として利用することは可能であろう。さてこの第3表で、以上で検討してきたレーデンによる調査からの家計事例として取り上げたのは、海外貿易会社ベルリン・モアビート工場に働く指物工と補助労働者 *Arbeitsleute* の家計についてのものである⁴⁹⁾。この事例について注意しなければならないのは、それが実際に存在した具体的家計のデータでも、また計算上設定された標準家族についてのデータでもなく、同工場の当該職種に属する全労働者についての平均値を示したものだという点である。すなわちまず年収が、年齢、賃金高、家族構成の違いを無視して指物工25名(うち既婚者22名、平均家族構成員数4.2)、補助労働者60名(同じく37名、3.0)の家計の単純平均値として算出され、その枠内で各支出項目への配分が推計されたものと思われる。レーデン自身は1847年には「標準労働者家族」(夫婦と子供3人もしくは他のメンバーからなる5人構成)という概念を用いるようになるが⁵⁰⁾、ここに示した資料上の制約はそれ自体、1840年代中葉の労働

47) Ders., *Erwerbsmangel, Massenverarmung, Massenverderbnis—deren Ursachen und Heilmittel*, in: *Zeitschrift*, Jg. 1, S. 118 f.

48) 本表にとりあげた各事例についての説明や出典は、本章の当該箇所を参照されたい。

49) GSStA, Rep. 109, 3641, Bl. 46. 前掲拙稿(1978年), 62ページ, に拠出。

第3表 ベルリン労働者の家計構成（1846-1908年）

| 年次 | 事 例 | | 収 入 | | 支 出 構 成 | | | | | | |
|--------|---------|-------|----------|------------------|----------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|------------------------|----------------------|
| | 世帯主職業 | 家族員数 | 年間総収入(M) | 世帯主労働収入% | 年間総支出(M) | 飲食費% | 住居費% | 被服費% | 光熱費% | 非消費支出 ⁽⁵⁾ % | その他 ⁽⁶⁾ % |
| 1 1846 | 機械工場指物工 | (4.2) | 768 | 78.1 | 768 | 60.5 | 13.3 | 15.6 | — | 2.8 | 7.8 ⁽²⁾ |
| 2 1846 | 同・補助労働者 | (3.0) | 525 | 77.1 | 525 | 57.1 | 17.1 | 13.1 | — | 3.5 | 9.2 ⁽²⁾ |
| 3 1848 | 農労働者 | 5 | — | — | 360 | 61.3 | 8.3 | 10.0 | 8.7 | 2.5 | 9.2 ⁽³⁾ |
| 4 1879 | タ労働者 | 5 | 1352 | — ⁽⁴⁾ | 1403 | 51.3 | 13.7 | 16.4 | 5.7 | 2.3 | 10.6 ⁽⁵⁾ |
| 5 1879 | 積ンガ工 | 4 | 1232 | 73.1 | 1278 | 57.0 | 11.0 | 7.0 | 12.5 ⁽¹¹⁾ | 4.8 | 7.7 ⁽⁶⁾ |
| 6 1896 | 積ンガ工 | 5 | 1448 | 93.9 | 1641 | 56.6 ⁽¹²⁾ | 14.6 | 14.0 | 6.1 | 3.7 | 5.0 ⁽⁷⁾ |
| 7 1907 | 運労働者 | 4 | 1533 | 86.3 | 1551 | 64.5 ⁽¹³⁾ | 18.8 ⁽¹³⁾ | 8.6 ⁽¹⁴⁾ | 3.9 | 2.8 | 1.4 ⁽⁸⁾ |
| 8 1907 | 教 員 | 4 | 3352 | 95.4 | 3035 | 37.8 ⁽¹⁵⁾ | 23.1 ⁽¹³⁾ | 12.1 ⁽¹⁴⁾ | 3.7 | 7.7 ⁽¹⁷⁾ | 15.6 ⁽⁹⁾ |
| 9 1908 | 旋盤工 | 6 | 2049 | 98.8 | 2062 | 54.2 ⁽¹⁶⁾ | 14.2 ⁽¹³⁾ | 14.9 ⁽¹⁴⁾ | 3.5 | 4.6 | 8.6 ⁽¹⁰⁾ |

注：個々の事例についての説明，出典等については，各々，本文中の記述及び注記を参照願いたい。なお貨幣単位はM=マルクに統一した。また備考の百分率は断りのない限り，支出総額に対するものである。

備考：(1) 原則として，国，自治体，教会への税，学校授業料，各種保険料。

(2) 光熱費を含む。

(3) 農具，飼料費を含む。

(4) 妻，葉巻き作業に従事。

(5) 家具 2.9% 医療費 2.1% 新聞・組合費 1.1% 洗濯代 1.9% 娯楽 2.6%。

(6) " 2.4% " 0.5% " 1.8% " 0.2% " 2.8%。

(7) " — " 2.3% 組合・集会費 1.2% " — タバコ 1.5%。

(8) 教養娯楽費1.1%，他。

(9) 医療費5.0%，教養娯楽費3.0%，寄付金等5.0%，他。

(10) 教養娯楽費2.6%，タバコ3.6%，その他。

(11) 「恐らくは過大に報告。」（調査者注）

(12) ビヤホール等での飲食12.2%。

(13) 家具，家事用品を含む。

(14) 洗濯代を含む。

(15) 夫婦，子供2人（6，9歳）世帯の食費（計1001マルク）内訳：肉類31.2%，バター5.5%，ジャガイモ2.9%，パン14.2%，果実・緑野菜2.3%，牛乳11.7%，コーヒー・タバコ6.2%，外食8.5%，他。

(16) 夫婦，子供2人（4，7歳）世帯の食費（計1148マルク）内訳：肉類28.8%，バター11.4%，ジャガイモ1.6%，パン5.9%（但し他に粉，米等に6.7%），果実・緑野菜8.8%，牛乳15.1%，コーヒー・タバコ2.6%，外食0.7%，他。

(17) 授業料その他の教育費4.6%。

(18) 税を含む。

者家計調査の実態を象徴するものと言えよう。

この点から言うと、1848年革命の渦中、「労働諸階層の物質的狀態の改善をめぐる問題」は「きわめて重要な問題」であり、「この問題の解決はまずもって、改善をはかるべき状況および充足することが望まれる欲求についての、完全かつ正確な認識にかかっている」との観点から行なわれた、プロイセン王立農村經濟審議会 *Königliches Landes=Oeconomie=Collegium*⁵¹⁾による「農村労働問題」調査⁵²⁾は、一つの前進を見せている。すなわちこの調査は、各地の農業協会あてのアンケート調査という点でレーデンの調査と同様の性格を持つものの、その質問形式はより整理されたものとなっているのである。

質問は二つの主要項目からなる。まず第一は、「平均5人、すなわち夫婦と14歳未満の2人ないし3人の子供、または老人1人（夫婦いずれかの父または母）からなる農村労働者家族が、当該地域の同階層の人々の通常の生活様式に従って一応の生活を営むのに必要な額」についてのものである。具体的には(1)住居費、(2)光熱費、(3)食費、(4)被服費、(5)家畜の飼料費、(6)農具、家具に要する費用、(7)塩代、(8)公租公課、という八項目への支出額を、当該地の価格で表示することが求められている。これにたいし第二の質問は主として収入面に係わるもので、上記の生活に必要とされる額を各労働者が「自らの収入」で「一応、持続的」に賄いうるか否かが問われている。各地の農業協会あての『回状』は続けて、この問への正確な回答を得るためとして、農村労働

50) Frhr. v. Reden, *Erwerbsmangel*, S. 118. Ders., *Flüchtige Erinnerungen aus einem freien Vortrage über Lebensmittelpreise und Arbeitslöhne*, in: *Zeitschrift*, Jg. 1, S. 568 f.

51) これは1842年に、当時プロイセン各地に計176あった農業振興を目的とした農業協会 *landwirtschaftlicher Verein* の中央機関として設立されたものである。なお農業協会数は1848年初頭には317にのぼる。W. v. Altröck, Artikel: *Landwirtschaftliches Vereinswesen*, in: *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, hrsg. v. L. Elster u.a., 4. Aufl., 6. Bd., Jena 1925, S. 212 f.

52) この調査結果をまとめたのが Alexander v. Lengerke (Hrsg.), *a. a. O.*, (注33参照) である。なお上の引用および以下のこの調査の特徴についての記述は、*ebd.*, S. 5-8, に収められた、1848年6月22日付の同審議会による調査依頼の『回状』に基づいている。この調査については、Ernst Engel, *a. a. O.*, S. 18 f., 前掲訳書, 42ページ以下、藤瀬浩司『近代ドイツ農業の形成』御茶の水書房, 1977年, 335ページ以下, を参照。

者を「雇農あるいは農耕奴婢」、「家持日雇」、「無産日雇」という三つのカテゴリーに分け⁵³⁾、第一のカテゴリーについては現物給付、賦役、第二については所有規模、地片の状態、第三については年間就労状況、出来高払い額等々といった追加質問を用意し、最後に、個々のカテゴリーに属する労働者の「暮し向き *Lebensweise* の描写」を求めている。

このアンケート調査に対して、各地の農業協会からは最終的には185通の回答が寄せられたが⁵⁴⁾、その中から第3表には、ベルリンの北東約40 Kmに位置するブランデンブルク州オーバー・バルニム郡ノイシュタット・エヴァースヴァルデに関する報告を取りあげた⁵⁵⁾。理由はさしあたりベルリンに比較的近いということと、その支出総額が、プロイセンの農村労働者家族全体の平均値としてレンゲルケがあげている115ターラーに近いという二点にある。このうち家計支出についてのデータは当該地の農業協会によるいわば標準生計費の推計値といえるものであり、他方、収入欄が空欄となっているのは、このアンケート調査においては家計の収入状況が支出と切り離され、別箇に扱われていることに起因する。すなわち、各労働者カテゴリー別の日給額や、現物給付についての細かな報告は存在する⁵⁶⁾ものの、農村労働者家計の年間総収入についてのデータはなく、最後の質問項目である「暮し向き」についても、「オーバー・バルニム郡では労働階層は全体として十分な栄養を取っており、中肉中背、強健であると言える。彼らの風俗について問題にすべき点はない」⁵⁷⁾等といった、概括的なコメントを見出しうるにすぎないのである。

以上で検討してきたドイツにおける「黎明期の家計調査」の特徴は、次の二点に要約することができよう。まず第一に、「工場主」、官僚、農業協会といった雇傭主、ないしはそれに近い立場の人々へのアンケート調査であること、

53) 各カテゴリーの訳語は、藤瀬 前掲書、336ページ、による。またその概念規定については、同書、341-2ページ、を参照。

54) Alexander v. Lengerke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 9 f.

55) *Ebd.*, S. 134.

56) *Ebd.*, S. 142, 147, 157, 161.

57) *Ebd.*, S. 168.

そして第二に、試行錯誤的な面を含むとは言え、現代の用語で言えば労働者世帯の標準生計費の推計という方向に向っていることである。

3 19世紀第4・四半期

19世紀後半のドイツにおける労働者家計調査の出発点となったのはこれらドイツにおける調査の試みではなく、すでにあげたデュークプティヨール・プレーの仕事であるが、これをどのように評価し継承するかをめぐって、ドイツでは二つの異なる立場が現れた。エンゲル係数の名称によって馴染みの深いエンゲルの立場と、最近ではむしろ民俗学のフィールドワーク的なものとしての評価を受けているシュナッバー・アルント⁵⁸⁾に典型的にみられる立場である。

1850年から58年にかけてザクセン王国統計局長の地位にあったエンゲルは1857年その『統計局雑誌』に、「ザクセン王国における生産及び消費事情」と題する論文⁵⁹⁾を発表した。この論文は国家の人口政策に基礎を与える「正確な生産・消費統計」を得るための方法を、デュークプティヨール・プレーにより与えられた労働者の消費についての統計的データを再整理することによって探ったものと言えるが、その際彼が両者に対して抱いていた批判は次の言葉に象徴されている。「それ(ル・プレーを中心とした仕事)は確かに真珠を提供しているが、それらを結び合わせる糸は与えられていない。この批判はデュークプティヨールの著作にもあてはまる。」(S. 8) ここで彼が「糸」と言っているのは、データから「帰納的方法」により探り当てることのできる「一般的法則性」のことであり(ebd.), 具体的には後にエンゲルの法則の名で呼ばれることになる、「ある家族が貧乏であればあるほど、総支出のより多くの部分が飲食物の調達にふり向けられねばならない」という法則(S. 28 f.)をさしている。だがエン

58) こうした観点から彼の仕事を取りあげた邦語文献として、坂井淵二『ドイツ民俗紀行』法政大学出版局、1982年、29ページ以下、がある。

59) Ernst Engel, Die Productions- und Consumtionsverhältnisse des Königreichs Sachsen, in: ders., a. a. O., Anlage I, 前掲訳書, 180ページ以下。なお以下の叙述では同一文献からの引用箇所は、本文中にページ数を挿入して示すことにする。

ゲルの目的はこうした「法則」の導出そのものではなく、この「法則」を手がかりに「標準消費 Normalkonsumption」の量を確定することにあつた。そしてこうした方法的立場を示すことにより、彼は間接的にではあるが、1840年代に行なわれた標準生計費推計の試みを批判しているのである⁶⁰⁾。

では彼の言う「標準消費」量を捉えるための基礎データはいかにして得られるのだろうか。1881年の論文⁶¹⁾においてエンゲルは、気象学の方法と対比しつつこの間に次のように答えている。すなわち気象学の方法の要点は、「直接的観察の不可能な平均的状況」を「多くのしかし相互に繋がりのない日常観察 Tagesbeobachtung」によって把握することにあるが (S. 386)、生産・消費統計にとっては「きちんと記入された家計簿」の調査がこの「日常観察」にあたるものとされているのである。彼の表現によれば、「きちんと記入された家計簿はさんざん使われて年度末にはばらばらになりかけていても、社会気象 soziales Klima を計り決定する道具となる」(S. 389) のである。この「社会気象学」を可能とするためには、プロイセンの場合であれば、本来、「全国各地からの千ないし数千にのぼる、それぞれ状況を異にしながらもある程度は典型性を持つ家計についてのきちんと記入された家計簿」が「定期的に提供される」ことが必要となる(S. 387) が、エンゲル自身この時点では、国家をそのための調査主体とすることは適當ではなく、とりあえず自由意志による種々の協会の活動に依頼すべきだと考えていた (S. 389)。

これに対しシュナッパー・アルントのとった立場は際だった対象をなしている。彼の論文・講演記録の編者の要約を借りれば⁶²⁾、「国民経済学」において「全くの継子扱い」を受けてきた「消費」の問題を対象とする「私経済の統計的

60) エンゲルの批判は、「推測統計 Conjectural-Statistik は直観的なし慰いつきの統計 Institutions- oder Eingebungs-Statistik に他ならない」(ebd., Anlage I, S. 28) という言葉によく示されている。

61) Ernst Engel, Das Rechnungsbuch der Hausfrau und seine Bedeutung im Wirtschaftsleben der Nation, in: *Zeitschrift des Königlich Preussischen Statistischen Bureaus*, 21. Jg., 1881, S. 379 ff.

62) Leon Zeitlin (Hrsg.), Dr. Gottlieb Schnapper=Arndt, *Vorträge und Aufsätze*, Tübingen 1906, S. 13 f.

研究」に見られる二つの対立的方法、すなわち家計の大量観察に依拠する「外延的方法」と、調査を少数の典型例の徹底した観察に限定する「内延的方法」のうち、エンゲルは前者を、シュナッパー・アルントは後者の道をとったのである。

シュナッパー・アルントの「私経済統計」の方法上の特徴は、1903年に『国際統計研究所報告』に発表された論文⁶³⁾に明瞭に示されている。そこにおいて彼はまずル・プレーを、「文学におけるリアリズムに対しゾラが持ったのと同様、社会描写に対し画期的地位を占めている」(S. 20) として高く評価する。そのル・プレーの方法の核心は彼にとっては、家計の個々の項目についての資料収集、その資料の計算方法ではなく、「数量的ではあるが同時に言葉による豊かなコメントを付された叙述によって経済上の一つのミクロな有機体 Mikroorganismus の生活像を捉えるべく、細部にまでわたる聞き取りを行った」(S. 21) 点に存するのである。

とはいえシュナッパー・アルントは、家計簿の持つ資料価値そのものを否定してはいない。いかなる場合でも家計簿に基づく計算のみが信用できるとする考えを「無茶な誇張」、家計統計がなしうる、またはなすべきことの「一面化」として批判 (S. 23) しているのであり、彼自身の言うところの「具体的再構成法 die konkret rekonstruierende Methode」の要点は次の二つのテーゼにまとめられている。すなわち(1)「個別研究は出来る限り家計簿に基づくべきである」、(2)「注意深くまとめられた個別研究は、たとえ家計簿が入手不可能であっても、個々の住民層の生活状態と経済的状況の認識にとって、きわめて有効な手段の一つを提供する」という二点 (S. 27) である。そして彼のこの方法に沿って行なわれた、あるいはこの方法を確立する基礎となったのが、1880年代初頭に相次いで発表された、バーデン・シュヴァルツヴァルトにおける時計板彩色師の家族についての研究⁶⁴⁾であり、高タウヌス地方の農村生活調査に基づく事

63) Gottlieb Schnapper=Arndt, Zur Theorie und Geschichte der Privatwirtschafts=Statistik, in: *ebd.*, S. 16 ff.

64) Gottlieb Schnapper, Beschreibung der Wirtschaft und Statistik der Wirtschaftsrechnungen ↗

例研究⁶⁵⁾であった。

こうした家計調査の方法をめぐる議論から浮かび上がってきた家計簿方式に基づく家計計算を、「最初にかつ模範的に」試みたとされる⁶⁶⁾のが、1890年に出版されたフランクフルトの労働者家計調査⁶⁷⁾である。これは1888年に三つの家族を対象に行なわれた「年間を通しての完全な家計計算」(S. III)の報告であるが、方法的には、基本的にシュナッパー・アルントの「具体的再構成法」を継承し、その二つの要点のうちの前者、すなわち家計簿に基づく個別家計調査をより厳密に実行することを目指したものと見ることができよう。この調査の基本的な立場は、報告の前書きを書いたフレッシュが「最近の国民経済学」の二つの方法、すなわち「大量観察」と「個々の特定の事象の動向把握」という方法の優劣を二者択一的に論ずるのではなく、両者の目的による使い分けを主張している点にも現れている。すなわち前者は賃金、労働時間等の「生業状況」を捉えるのに適しているのに対し、「消費状況」を認識するには後者の方法により、「個々の少数の標準的条件の下で暮らしている家族の消費」のあり方を研究する必要があるとされている(S. XV f.)のである。

この調査がシュナッパー・アルントの方法を継承するものであることは、彼がこの調査のための推薦文(S. XVII-XXII)を書いていることから窺えるが、さらに両者には一つの共通した方法上の問題点が伏在している。すなわち、「家計収支の中に描かれたある家族の状況全体は、その大要において、もし事例の選択に際し全く特異なおよそありそうにもない失敗がない限り、大きいか小さいかは別としてともかく一つの何らかの範囲にとって典型となるであろう

der Familie eines Uhrschildmalers im bad. Schwarzwald, in: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, 36. Bd., 1880, S. 133 ff.

65) Gottlieb Schnapper-Arndt, *Fünf Dorfgemeinden auf dem Hohen Taunus. Eine social-statistische Untersuchung über Kleinbaurntum, Hausindustrie und Volksleben*, Leipzig 1883.

66) Gerhard Albrecht, a. a. O., S. 43 f.

67) *Frankfurter Arbeiterbudgets. Haushaltungsrechnungen eines Arbeiters einer königl. Staats-Eisenbahnwerkstätte, eines Arbeiters einer chemischen Fabrik und eines Aushilfsarbeiters*. Veröffentlicht und erläutert von Mitgliedern der Volkswirtschaftlichen Sektion des Freien Deutschen Hochstiftes. Beantwortet im Auftrage der Sektion von Karl Flesch, Frankfurt a. M. 1890.

う」(S. XVIII f.) というシュナッパー・アルントの文章に見られる、個別事例の「典型性」についてのきわめて楽観的な考え方がそれであり、この点は後にビューヒャーによる厳しい批判を受けることになる。

ところで19世紀第4・四半期の労働者家計の事例として、第3表にはベルリンの三事例(4, 5, 6)をあげてある。この内最初の二事例は、1879年10月にベルリンで開かれたドイツ諸都市統計局長会議の決議に従い、ベルリン市統計局が行なった家計調査⁶⁸⁾から取ったものである。六都市の労働者家計調査の必要性を強調したこの決議自体は、十分な準備を経て出されたものとは言えず、とりあえず2, 6, 10歳の子供を3ないし4人持つ労働者家族の家計状況を、労働者ないし手工業者教育協会等の援助を得て試験的に調査することを目指したものであり、ベルリンのこの事例のデータも短期間の調査をもとにした推計値にすぎない⁶⁹⁾。この調査は調査主体が自治体である点に大きな特徴が存するが、1880年代には方法的にはこの調査と同じやり方を取った個人の資格による様々な労働家計調査が行なわれ、その成果とすでに存在する調査結果の様々な比較(時間的, 空間的, 社会階層別)が試みられている⁷⁰⁾ことも、我々の設定した家計史研究の課題との関連で見落すことができない。

第3表に取りあげた今一つの事例は、ベルリン市統計局のヒルシュペルクが1896年度についてアンケート形式で行なった調査からのものである⁷¹⁾。この調査は市の1879年調査と並び、上述のフランクフルト調査のような家計簿を基礎にした調査がこの時代にはまだ定着していなかったことを例証しているが、ヒ

68) ベルリンの15家計と、同趣旨で行なわれたフランクフルト調査の14家計の支出構成は、*Statistisches Jahrbuch der Stadt Berlin*, 7. Jg., Statistik des Jahres 1879, Berlin 1881, S. 136 ff., に報告されている。しかしここには収入についての記録がないので、表3のデータは、この調査結果を利用した、Paul Ballin, *Der Haushalt der arbeitenden Klassen*, I. Teil, Berlin 1883, S. 104, 107, から取った。

69) この会議と調査については、Gerhard Albrecht, *a. a. O.*, S. 38, Paul Ballin, *a. a. O.*, S. 54, を参照。

70) そうした例として上記 Ballin の他、Ignaz Gruber, *Die Haushaltung der arbeitenden Klassen*, Jena 1887. Carl Hampke, *Das Ausgabebudget der Privatwirtschaften*, Jena 1888, 等がある。

71) E. Hirschberg, *Die soziale Lage der arbeitenden Klassen in Berlin*, Berlin 1897, S. 292 f.

ルシュベルクの調査の特色は、質問票の配布を労働組合組織の協力を得て行なった点にある⁷²⁾。

この点をより明確にし、労働組合組織自身が調査主体となって行なわれたのが、1899年から1900年にかけてのブラウンを中心にしたニュルンベルク労働者書記局 Arbeiter-Sekretariat の家計調査⁷³⁾である。この調査は一年間記入の家計簿方式に基づく、この時代の調査としては大規模（44例）な、しかも国、自治体によるものではない調査という意味で、19世紀の労働者家計調査の一つの到達点と言えるものであるが、その内容の検討は別の機会に譲るとして、本稿の関心からとりわけ興味深いのは、調査の中心者ブラウンがこうした家計調査の意義をきわめて悲観的に総括している点である。

すなわち調査報告書の冒頭で彼は次のように書いている。「我々はまずここで次のことを明記しておきたいと思う。つまりこの調査は、成果自体はきわめて興味深いものではあるが、自らに課した（ニュルンベルクの労働者の生計状態を明らかにするという）課題を達成しえなかったということである。」（S. VII）さらにブラウンは『ノイエ・ツァイト』に寄せた論稿⁷⁴⁾でも、こうした調査は莫大な費用を要するにもかかわらず、「社会状況をより深く認識し、それをアジテーションにおいて実際に使うという目的からすると、得られるものは予想したよりもはるかに少ない」（S. 148）と、同様の見解をより明確に述べている。こうした彼の悲観的な総括にはいくつかの理由があるが、最大の理由は、調査を依頼したこれに応ずる労働者がどうしても継続的に組合活動に参加している少数の「労働者のエリート」に限られ、調査対象に「労働者階級の状態」を解明する上でのサンプルとしての「典型性」が欠如してしまう点（S. 149 f.）に

72) この場合具体的には、『ゲヴェルクフェライン』編集長と、「労働組合委員会 Gewerkschaftskommission」事務長に協力を依頼している。Ebd., S. 290.

73) *Haushaltungs=Rechnungen Nürnberger Arbeiter. Ein Beitrag zur Aufhellung der Lebensverhältnisse des Nürnberger Proletariates*. Bearbeitet im Arbeiter=Secretariate Nürnberg, Nürnberg 1901.

74) Adolf Braun, *Haushaltungsrechnungen der Arbeiter*, in: *Die Neue Zeit*, XX. Jg., I. Bd., Nr. 5, 1901-02, S. 148 ff.

あった。

こうしたブラウンの総括は、労働者家計をめぐる資料の整理を「労働者の社会史」研究の一基礎作業として行なおうとしている我々にとって、資料上の制約を無視した家計資料の絶対視、すなわちこれを単独の資料として労働者層全体の生活状況を叙述することへの警告を発したものとして、重い意味を持っている。

以上で検討してきた19世紀第4・四半期のドイツにおける労働者家計の調査は、ビューヒャーの1906年の論文⁷⁵⁾のタイトルを借りれば、方法的には、聞き取りやアンケートに基づき個別家計の細部にわたる実態の解明を目指す「家計予算」法（シュナッパー・アルントの流れ、一年間の家計収支そのものは推計値になるのでこの名がつけられている）と、長期間記入された家計簿に基づき、最終的には一国の生産・消費量の推計をめざす「経済計算」法（エンゲルの流れ）を両極とする、種々の試行錯誤の歴史であった。この論文においてビューヒャー自身は、「国民経済学に利用可能な成果」をいかに入手するかという視点から、「社会統計的な細密画」を描くことに固執する前者を批判し、後者の方法をとるべきことを主張している（S. 372）。そして彼のこうした主張の根底にあったのは、「人間の個性は消費においても決して消滅することはない」という見方、すなわち少数の個別的事例から抽出される数値は「決して典型とか規範」になりうるものではなく、せいぜい一つの「可能性」を示しているにすぎない（S. 383）という、シュナッパー・アルントらの個別事例の「典型性」への楽観論に対する批判であった。

4 20世紀初頭

19世紀第4・四半期の労働者家計の様々な調査、議論から、個人ないし労働組合組織を調査主体とする家計簿方式による調査へという一つの流れが浮かび

75) Karl Bücher, Haushaltsbudgets oder Wirtschaftsrechnungen?, in: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, 62. Bd., 1906, S. 686 ff.

上がってきたが、これを受けた20世紀初頭の家計調査の特徴は、調査主体として帝国統計局が登場したことにある。1907年調査はそうした官庁統計としての家計調査の最初の試みであるが、まずそこに至るまでの経緯および調査の実施状況について、この調査の報告書⁷⁶⁾に従って簡単にふり返っておこう。

帝国統計局による家計調査の直接的なきっかけとなったのは、1902年の労働者統計部の設置であった。その時点では労働者家計についての官庁統計にあたるものとしては、事実上失敗に終わったとはいえるものの1870年代末から80年代初頭にかけてドイツ諸都市統計局長会議がイニシアティブを取って行なったものが存在しており、帝国統計局もさしあたり同会議との共同調査の方向を探った。これと前後して1903年にはベルリン市統計局調査⁷⁷⁾、1905年にはイギリス商務省のドイツ生計費調査が行なわれ、それぞれ908、5046という大量の家計事例が報告されているが、これらはいずれもアンケート方式によるデータという点で大きな弱点に有していた。これに対しドイツ諸都市統計局長会議が1906年の大会において決定した帝国統計局との共同調査は、家計簿方式によって実施されることとなった（S. 5*f.）。

この決定後、準備作業は短期間で進められ、(1)調査対象を労働者家計に限定せず、原則として年収3000マルク以下の「小所得者」家計とする、(2)調査対象の選定は各市統計局が健康保険組合、各種労働者組織の協力を得て行なう、(3)一年を通じての家計簿記入が実際上困難な場合、一ヵ月ないし数ヵ月づつ記入された職業、収入、家族構成の類似した家計簿を「繋ぎ合わ」せて一年分の家計簿を作成する等々の方針に基づき、1907年1月1日から31都市の参加を得て調査が始められた（S. 6*f.）。調査規模については、家計簿の配布総数が4136（内ベルリンおよび郊外589）、調査に参加した家族3855（同じく469）、一ヵ月以上家計簿を記入した家数3575（466）、このうち一年間通して記入した家族960（73）

76) *Erhebung*（注29を参照）。

77) *Lohnermittelungen und Haushaltrechnungen der minder bemittelten Bevölkerung im Jahre 1903. Berliner Statistik*, hrsg. vom Statistischen Amt der Stadt Berlin, 3. Heft, Berlin 1904.

という数字 (S. 10*) が残されており、調査報告書においてはこの内 852 家計 (73家計) が資料として公表された (S. 2-149)。

この1907年帝国統計局調査は、欧米の「比の方面における最も進みたる調査」として我国の家計調査にも大きな影響を与えた⁷⁸⁾。事実、大正5年(1916年)に日本における近代的家計調査の嚆矢とされる「東京ニ於ケル二十職工家計調査」を行なった高野岩三郎も、それに先立ってこの調査を紹介し次のような論評を加えている⁷⁹⁾。すなわち彼は、「独逸全体ノ小所得者階級ヨリ見レバ僅ニ一小部分ニ過ザル家計ノ材料ヲ得タルニ過ズ、從テ之ヲ以テ全体ノ状態ヲ推知スルニ充分ナラズ、比点ヨリ言ヘバ比調査ハ統計的調査ト称センヨリモ寧ロ簡別的調査ノ集リ或ハ簡別的調査ト統計的調査ノ中間ト呼ブノ当レルヲ見ル」(69-70ページ)とこの調査に的確な批評を加えつつも、全体としてはそれが従来の家計調査の持っていた「私人ノ調査」、「断片的、個別的」調査、「調査用紙配布」による「短期間ノ材料」の調査という弱点(59-60ページ)を克服したもののとして、高く評価しているのである。

こうした高野によるコメントを待つまでもなく、ドイツにおいてもこの調査をめぐって様々な論評が現れる。その多くは調査準備の不十分さ、調査方法の不徹底に対し批判を向けたものであった。まずニュルンベルク調査の中心人物ブラウンは、調査プランを予め公表し専門家の討議にかけるとをしなかった点を批判し、「もしそれが行なわれていれば、実状を知らぬまま立案された、おそろしく気が利いてはいるが実施のはなはだ難しい、従って調査全体に疑問を抱かせ、調査をその開始とともに思わしくない批判にさらしてしまうような計画が立てられるようなことはなかったであろう」と述べる⁸⁰⁾。具体的には、収入については「労働者の千人中999人までは答えられない」過去一年の年収

78) 権田 保之助「本邦家計調査」高野 岩三郎編『本邦社会統計論』(『経済学全集』第52巻)改造社、昭和8年、8ページ。

79) 高野 岩三郎「独逸ノ小所得者家計調査ニ就テ」『国民経済学雑誌』第14巻 第4号、大正2年、59(579)ページ以下。

80) Adolf Braun, Amtliche Haushaltsrechnungs=Statistik, in: *Die Neue Zeit*, 25. Jg., I. Bd., Nr. 9, 1906-07, S. 310 f.

の記載を求めている点、そして支出については家計簿の一年間通しての記入が徹底していない点が批判されているのである（S. 311 f.）。この点についてはビューチャーもまた同意見であったが⁸¹⁾、彼は家計簿がすでに配布されている時点で実行可能な改善案として、次の二点をあげている。すなわち第一に、配布された家計簿の冒頭の余白ページに収入をその日付とともに記入させること、第二に、記入を一年間継続させるための手段（家計簿を定期的に提出させることを止め係官が記入者宅でコントロールすること、報償金の用意等）を講ずるという二点であり（S. 152）、前者は帝国統計局により実行に移された⁸²⁾。

これらの統計調査実施上の問題点に加え、現在では調査対象の「比重」についても疑問が提出されている。すなわち、地域分布の点では全人口の21.3%が居住する大都市からのサンプルが82.3%を数え、とりわけ労働者家計の場合はその比率が90%を超えること、家族構成で見ると4から6人の所に片寄る傾向があり、さらに職業分布上は公務員、あるいは労働者の同一職種内の収入ランクの高い層への片寄りが目立つとの指摘⁸³⁾である。

さらにまた翌1908年に実施されたドイツ金属工組合の手になる調査⁸⁴⁾も、帝国統計局調査に協力を惜しまなかったこの組合の同調査に対する、「ドイツ政府は残念ながら古くからの官僚的やり方でこの問題を事実関係の認識なしに取り扱った」（S. 5）という批判から生まれたものである。すなわち金属工組合調査は調査のポイントとして、最低一年間は家計簿を継続記入させること、対象となる金属工の賃金階層上の偏りをなくすことという二点を掲げ（S. 7）、実際1908年1月からの一年間にわたり、配布された家計簿400（ベルリン13）のうち実に320冊（同じく10）が継続して記入されるという成果を上げたのである（S. 8）。

第3表にはこの1908年調査からベルリンの旋盤工の事例⁸⁵⁾を、そしてさらに

81) Karl Bücher, Zur Frage: Haushaltungsbudgets oder Wirtschaftsrechnungen?, in: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, 63. Jg., I. Heft, 1907, S. 142 ff.

82) *Erhebung*, S. 6* f.

83) Jens Flemming und Peter-Christian Witt, a. a. O., S. XVI-XXIII.

84) *320 Haushaltungsrechnungen*（注29を参照）。

85) *Ebd.*, S. 104 f.

それとの対比を考え1907年調査からはベルリン近郊シェーネベルクの運河労働者家計と教員家計⁸⁶⁾を紹介したが、この両調査はこれらの事例からもうかがえるように、種々の問題を抱えているとはいえ、20世紀初頭のドイツ労働者の日常生活の実態を一つの角度から照射したものとして、高い資料価値を持つものであることは疑いえない。

IV 結 び

さて以上で我々は、労働者家計への関心の背景を明らかにし現在の研究状況を検討しつつ、労働者家計史研究の課題を探り、さらに19世紀中葉から20世紀初頭のドイツにおける労働者家計調査の歩みを、調査方法、調査主体の問題を中心に概観してきた。そして一連の家計調査報告の内に残されている資料がどのようなもので、それらを利用するにあたってはどのような点に留意すべきかについて検討を加えた。これらの諸点についてここで改めて要約する必要はないと思われるが、ただ今後研究を進めてゆくにあたって本稿が設定した家計史研究の課題について、最後に今一度整理しておこう。

その課題は、資料として残されているそれ自体としてはばらばらな労働者家計の具体的事例を相互に関連づけ、そこから個々の家計を包む各時代、各地域の日常生活像を照射するために不可欠な三つの検討項目からなる。すなわちベルリンの家計事例を基軸に、(1)家計構造の地域的相違(都市と農村、首都・大都市と中小都市)を探ること、(2)家計に示される社会階層間の生活像の違いを探ること、そして(3)これら特定時点の静態的な観察を時間的に繋ぎ合わせ、労働者家計の歴史的変化を跡づけることがそれである⁸⁷⁾。第3表にあげた9事例は、不十分ながらベルリンを中心にした時間的比較(1-5, 6-9)、空間的比較

86) *Erhebung*, S. 12.

87) 日本の家計資料を我々のこうした関心とも重なる形で整理したものとして、中川 清「家計資料にみる近代日本の都市生活」『商学論集』(新潟大学)第15号、1982年、141ページ以下、がある。また日本における生計調査史をたどりつつ「労働者世帯の生計の歴史」を検討したものとして、暉峻淑子『生活経済論』時潮社、昭和52年、103ページ以下、の叙述を参照。

（2-3），社会階層間比較（1-2，4-5，7-8-9）を各々一応可能にするだけの資料的基礎が存在することを示そうとしたものである。これらの各項目についてのデータをさらに収集，整理し，あるいはまた労働者と並び俸給，家計状況についての資料が比較的整っている公務員層⁸⁸⁾との比較を通じて，19世紀ドイツの労働者の日常生活像を明らかにすることが今後の具体的課題となる。

こうした労働者家計の歴史的研究を土台にこれにさらに種々の社会統計や労働者自伝⁸⁹⁾のような他の資料群の分析を絡み合わせてゆくことにより，我々は，工業化のプロセスのなかで新たに形成されてくる都市労働者家族の姿を捉えるための一つの有力な手がかりを得ることができよう。

88) ベルリンの事例についてはさしあたり，官僚自身の手で記入された家計簿を資料とした次の2研究を参照。Gertrud Hermes, Ein preußischer Beamtenhaushalt 1859-1890, in: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, 76. Jg., 1922, S. 43 ff., 268 ff., 478ff. Erna Meyer-Pollack, Der Haushalt eines höheren Beamten in den Jahren 1880 bis 1906, in: *Schriften des Vereins für Sozialpolitik*, 145. Bd., IV. Teil: Kosten der Lebenshaltung in deutschen Großstädten, I. Ost- und Norddeutschland, 2. Hälfte, hrsg. v. Franz Eulenberg, München und Leipzig 1915, S. 1 ff.

89) これについては最近の最も包括的な資料集，Wolfgang Emmerich (Hrsg.), *Proletarische Lebensläufe. Autobiographische Dokumente zur Entstehung der Zweiten Kultur in Deutschland*, 2 Bde., Reinbek bei Hamburg 1974f., を参照。